館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第26集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHISHINAI ISEKI

1993

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

1993

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成5年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教育長	髙瀬利一		
教育次長	田村粋男		
主管課	館林市教育委員会　文化振興課　文化財係		
文化振興課長	江森勝一		
文化財係長	早川紀正		
学芸員	岡屋英治		
主任	川島孝男		
調査補助	寺内景子		
作業員	石井悦雄	石川栄吉	石川有紀
	奥山裕り	川島健二	砂賀香織
	中條里香	寺内義正	野口文恵
	橋本治美	林　正行	松本末吉
	持田恵理		

3. 調査に伴う諸経費は、国及び群馬県より補助金を受け館林市が負担した。

4. 調査による出土遺物、調査記録、資料は館林市教育委員会で保管した。

5. 本書の取りまとめは、岡屋と川島が行った。

6. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関の御指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

《 目　　次 》

例　　言
第 I 章　館林市の環境 …… 1
　位置と地形 …… 1
　館林市内の遺跡 …… 3
第 II 章　各遺跡の内容 …… 5
　第1節　館林城跡 …… 5
　第2節　志柄1遺跡 …… 11
　第3節　小蓋林遺跡 …… 14
　第4節　小林遺跡 …… 17
　第5節　当郷本郷遺跡 …… 20
　第6節　八方遺跡 …… 23
抄　　録 …… 29

《 図 版 目 次 》

第 1 図　館林市の地形と調査された遺跡 …… 2
第 2 図　住居址の確認された遺跡と城館址 …… 4
第 3 図　館林城跡周辺図 …… 5
第 4 図　〃　「上野國館林城繪圖」 …… 9
第 5 図　〃　調査区全体図 …… 10
第 6 図　志柄1遺跡周辺図 …… 11
第 7 図　〃　調査区全体図 …… 13
第 8 図　小蓋林遺跡周辺図 …… 14
第 9 図　〃　調査区全体図 …… 16
第10図　小林遺跡周辺図 …… 17
第11図　〃　調査区全体図 …… 19
第12図　当郷本郷遺跡周辺図 …… 20
第13図　〃　調査区全体図 …… 22
第14図　八方遺跡周辺図 …… 23
第15図　〃　調査区全体図 …… 27

《 写 真 目 次 》

写 真 1　館林城跡調査前 …… 6
写 真 2　〃　重機による掘削 …… 6
写 真 3　〃　作業風景 …… 6
写 真 4　〃　2トレンチ …… 7
写 真 5　〃　5トレンチ …… 7
写 真 6　〃　12トレンチ …… 7
写 真 7　〃　6トレンチ …… 8
写 真 8　〃　9トレンチ …… 8
写 真 9　〃　17トレンチ …… 8
写 真 10　〃　20トレンチ …… 8
写 真 11　志柄1遺跡遠景 …… 12
写 真 12　〃　調査前 …… 12
写 真 13　〃　重機による掘削 …… 12
写 真 14　〃　1トレンチ …… 13
写 真 15　〃　2トレンチ …… 13
写 真 16　小蓋林遺跡遠景 …… 15
写 真 17　〃　調査前 …… 15
写 真 18　〃　重機による掘削 …… 15
写 真 19　〃　1トレンチ …… 16
写 真 20　〃　2トレンチ …… 16
写 真 21　小林遺跡遠景 …… 18
写 真 22　〃　調査前 …… 18
写 真 23　〃　2トレンチ …… 18
写 真 24　〃　1トレンチ …… 19
写 真 25　〃　重機による掘削 …… 19
写 真 26　当郷本郷遺跡遠景 …… 21
写 真 27　〃　調査前 …… 21
写 真 28　〃　重機による掘削 …… 21
写 真 29　〃　1トレンチ …… 22
写 真 30　〃　2トレンチ …… 22
写 真 31　八方遺跡遠景 …… 24
写 真 32　〃　調査前 …… 24
写 真 33　〃　重機による掘削 …… 24
写 真 34　〃　調査区全体 …… 25
写 真 35　〃　調査区全体 …… 25
写 真 36　〃　1トレンチ拡張部 …… 25
写 真 37　〃　1トレンチ …… 26
写 真 38　〃　2トレンチ …… 26
写 真 39　〃　3トレンチ …… 26
写 真 40　〃　4トレンチ …… 26

第I章 館林市の環境

位置と地形

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置する総面積60k㎡余り、人口約77,000人を擁する東毛と呼ばれる当地方の中核都市の一つである。市域は東西15km、南北8kmと東西に長く、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、渡良瀬川遊水池を経て茨城県に、南は邑楽郡明和村を越え利根川を境に埼玉県に接し、東南北をいずれも近距離の内に前記3県に囲まれている。また、県都前橋市まで約50km、首都東京までは東武鉄道伊勢崎線で浅草まで約65km、東北自動車道では館林インターから都心まで60km余りと、首都圏との結びつきも強い。

次に地形的に本市を概観すると、洪積地（洪積台地・内陸古砂丘）と沖積地（自然堤防・沖積低地・湿地・池沼・河川等）に大別され、県内でも標高の最も低い地域に属している。

洪積地は、本市中央部を東西の帯状に延びる台地となっており、「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市の高林から大泉町、邑楽町を経て館林市に達し、更に東の板倉町へと続いている。本市における標高はおよそ18m～25mである。その構成を見ると、河川の堆積物とされる礫、砂、シルトの互層の上に、中部及び上部ロームの二層が堆積し、形成時期は下末吉海進時に遡るとされている。

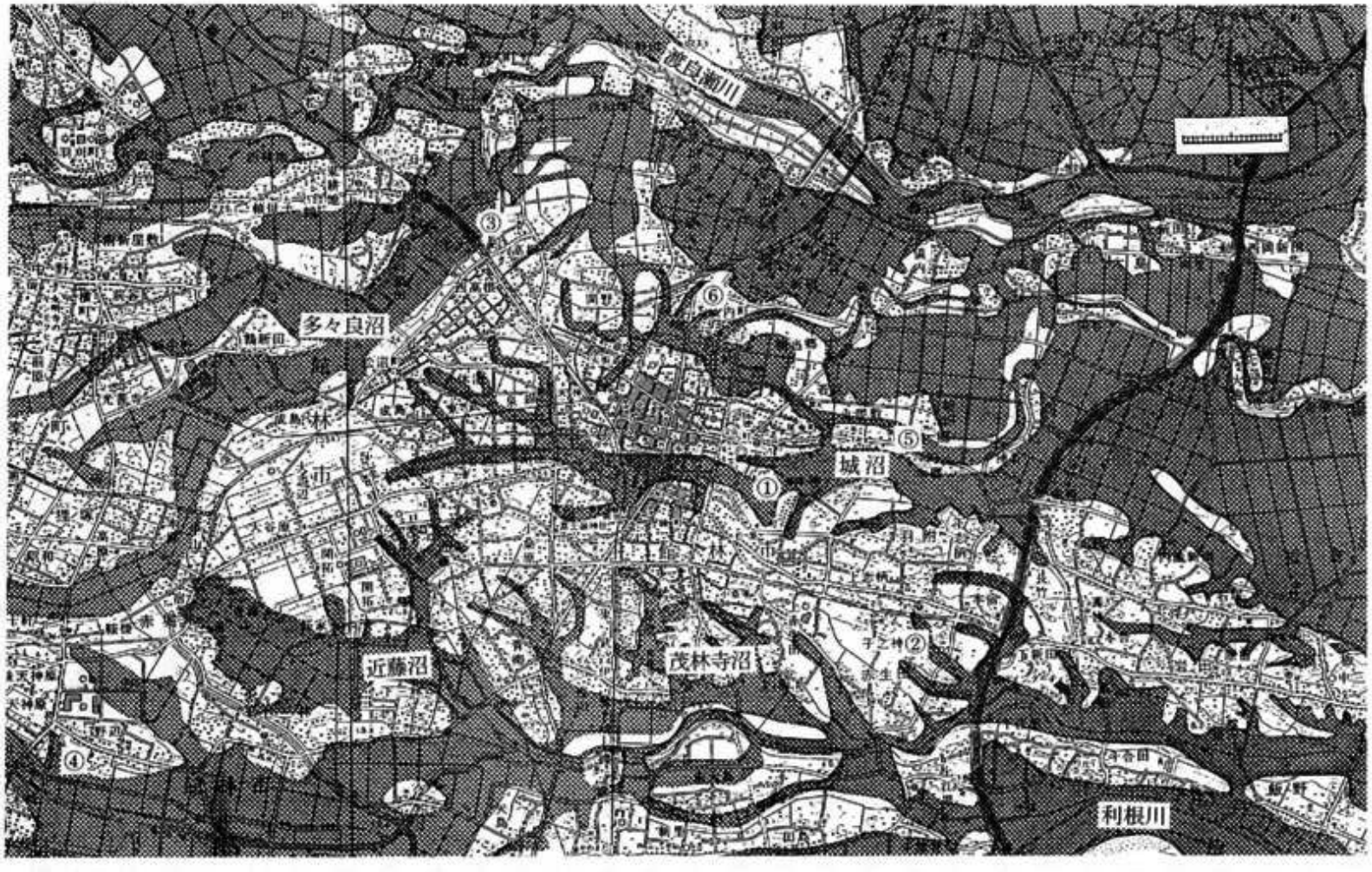
また、この「邑楽・館林台地」の西側から北側の縁に沿って、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）が走っている。幅約100m、洪積台地からの比高は5m前後で、大泉町古海から本市の高根に至る約13kmにわたり、本市の最高点はこの埋没河畔砂丘上にある。形成時期については、やはり下末吉海進時からその後の海退の時期に遡るといわれ、内陸部の砂丘としてはわが国最古のものである。

そして、この台地を取り囲むように、利根川及び渡良瀬川の氾濫原である標高15m前後の沖積地が広がっている。この沖積地を区分すると、北部の渡良瀬川沿岸地帯、南部の利根川沿岸地帯の二地帯に分けることができる。この沖積地には広大な低湿地が広がり、かつては大小の池沼が点在していた。また、この低湿地の中には蛇行する旧河道が残り、これに沿って自然堤防が発達している。

こうした台地や低地などからなる本市の地形には、北西から南東へ向けて緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面との比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。これは、埼玉県の北東部に中心を持つ関東造盆地運動の影響によるものと考えられる。

洪積台地はまた、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。その中でも市内最大の谷は鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分し、更に浅い谷が枝分かれするように延びている。こうした洪積台地を開析する谷には、ほかに茂林寺沼、蛇沼等の池沼を伴うものなど大小様々なものがあり、本市景観上の特徴の一つになっている。

第1図　館林市の地形と調査された遺跡



①館林城跡　②志柄1遺跡　③小蓋林遺跡　④小林遺跡　⑤当郷本郷遺跡　⑥八方遺跡

館林市内の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和58年から63年にかけて実施された市内遺跡詳細分布調査（「館林市の遺跡」）によれば、145ヶ所が推定されている。これは、現地踏査により遺跡としての可能性を推定したものであるが、内訳を見ると、旧石器時代－3、縄文時代－13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代－0、古墳から平安時代を含むもの－96（うち縄文時代の遺物散布の見られるもの23）、古墳－18（推定を含み延べ26基）、中世生産址－1、中世城館址－12（伝承地を含む）、近世城館址－2となっている。

「館林市の遺跡」を基にした遺跡の分布は、本市中央部の台地に接する池沼、低湿地との密接な関わりを示している。この分布は、沼、低湿地を核にした幾つかのブロックに分けることができ、ブロックごとに遺跡の時代別傾向に違いが見られる。

本市東部で東西に延びる城沼周辺には、大袋城遺跡をはじめ20以上の遺跡が推定され、時代別の傾向では、城沼北岸、南岸の東部と西部の三つに分けることができる。北岸では、今年度調査された当郷本郷遺跡ほか山王山古墳を含む善長寺付近遺跡など古墳・平安時代を中心とした遺跡の分布が見られる。南岸東部では、富士山古墳、古墳時代の住居址の確認された大袋城遺跡など、古墳時代が中心となっている。また南岸の西部では、昭和55、56年度に調査され縄文時代の住居址が確認された大袋Ⅱ遺跡をはじめ縄文時代の遺跡が分布している。

次に南部の蛇沼周辺では、昭和57年度の調査で縄文時代の住居址が確認された間堀遺跡をはじめ6ヶ所の遺跡があり、縄文時代の遺跡が分布している。

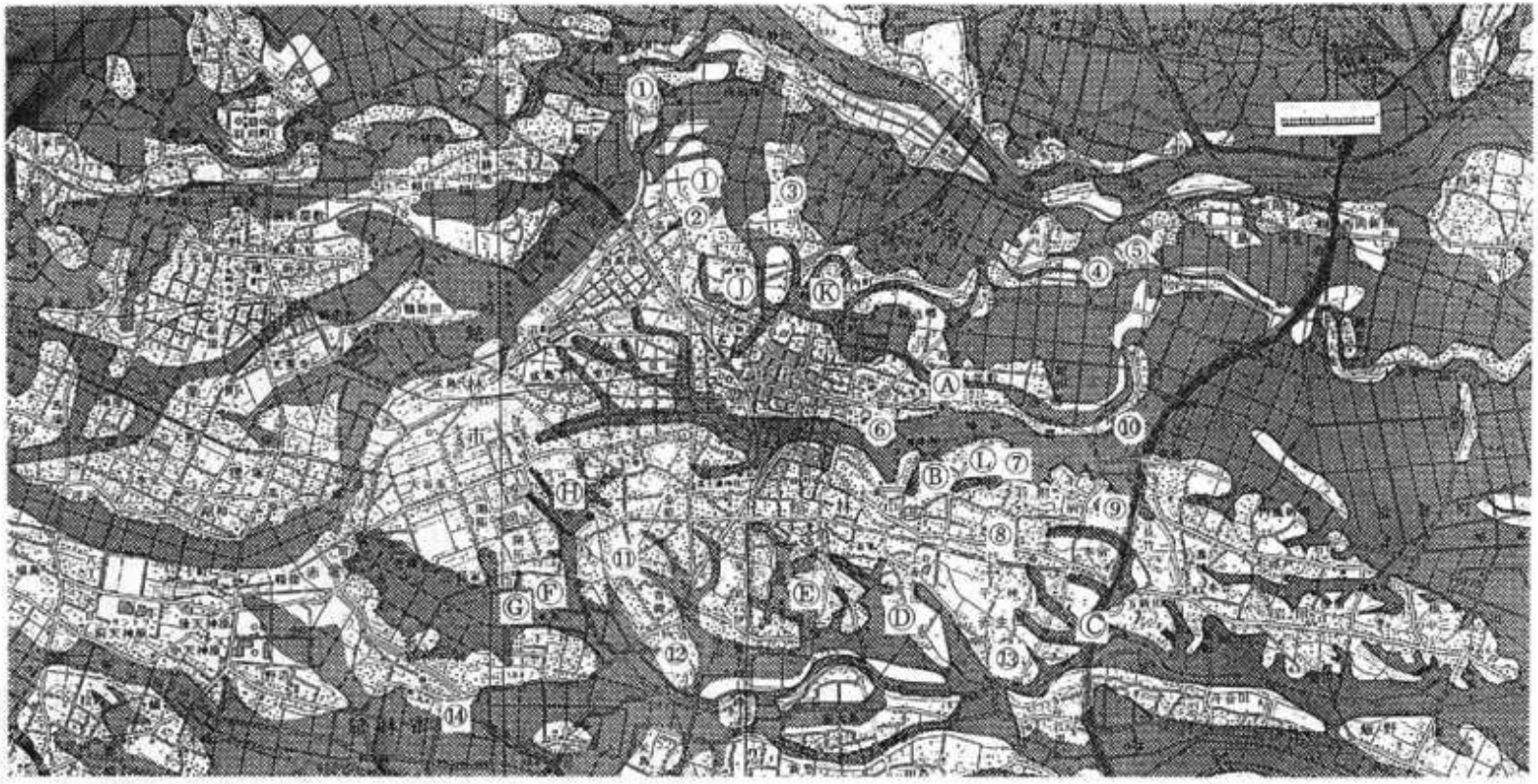
この蛇沼を伴う開析谷の西には、茂林寺沼が広がっており、これを取り巻くように10ヶ所に遺跡が推定されている。時代別の傾向では、沼の東側では大原道東遺跡ほか縄文時代が中心となり、西側では、前通遺跡、中山東遺跡など平安時代の遺跡が分布している。

また、南西部の近藤沼では、近藤沼へ続く北方の開析谷も含めた周辺で10ヶ所の遺跡が分布し、沼の周辺では、古墳時代の住居址の確認された南近藤遺跡、北近藤第一地点遺跡など古墳時代の遺跡が中心となっている。北方の開析谷の周辺では、伝右ヱ門遺跡をはじめ縄文・古墳時代の遺跡となっている。

このほか北部の旧河道沿いでは、平安時代の遺物を含む遺跡が多いが、全体的な傾向は捉え難い。また、南東部の洪積台地を刻む数本の開析谷周辺では、今年度調査された志柄1遺跡ほか古墳を含め20を越える遺跡が推定されているが、多くが平安時代の遺跡である。

これらのことから窺える遺跡分布上の特色として、時代別には縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代初頭へかけての遺跡が少なく、立地では縄文時代、古墳時代の遺跡が低地に面する台地斜面、台地上など台地の縁辺に多く分布し、奈良・平安時代になると遺跡数も増加し台地内部、自然堤防上にも分布が広がって行く傾向にある。

第2図　住居址の確認された遺跡と城館址



住居址
Ⓐ 尾曳町1遺跡
Ⓑ 大袋Ⅱ遺跡
Ⓒ 赤生田道満遺跡
Ⓓ 間堀遺跡
Ⓔ 下堀工道満遺跡
Ⓕ 北近藤第一地点遺跡
Ⓖ 南近藤遺跡
Ⓗ 伝右ヱ門遺跡
Ⓘ 高根・外和田遺跡
Ⓙ 岡野・屋敷前・岡遺跡
Ⓚ 八方遺跡
Ⓛ 大袋城遺跡

城館址
① 木戸城跡
② 高根城跡
③ 蛇屋敷跡
④ 磯ケ原城跡
⑤ 北大島館跡
⑥ 館林城跡
⑦ 大袋城遺跡
⑧ 青山屋敷跡
⑨ 白旗城跡
⑩ 羽附陣屋跡
⑪ 近藤陣屋跡
⑫ 青柳城跡
⑬ 侍辺城跡
⑭ 三林城跡

第Ⅱ章　各　遺　跡　の　内　容

第1節　館　林　城　跡（たてばやしじょうせき）

立地と環境

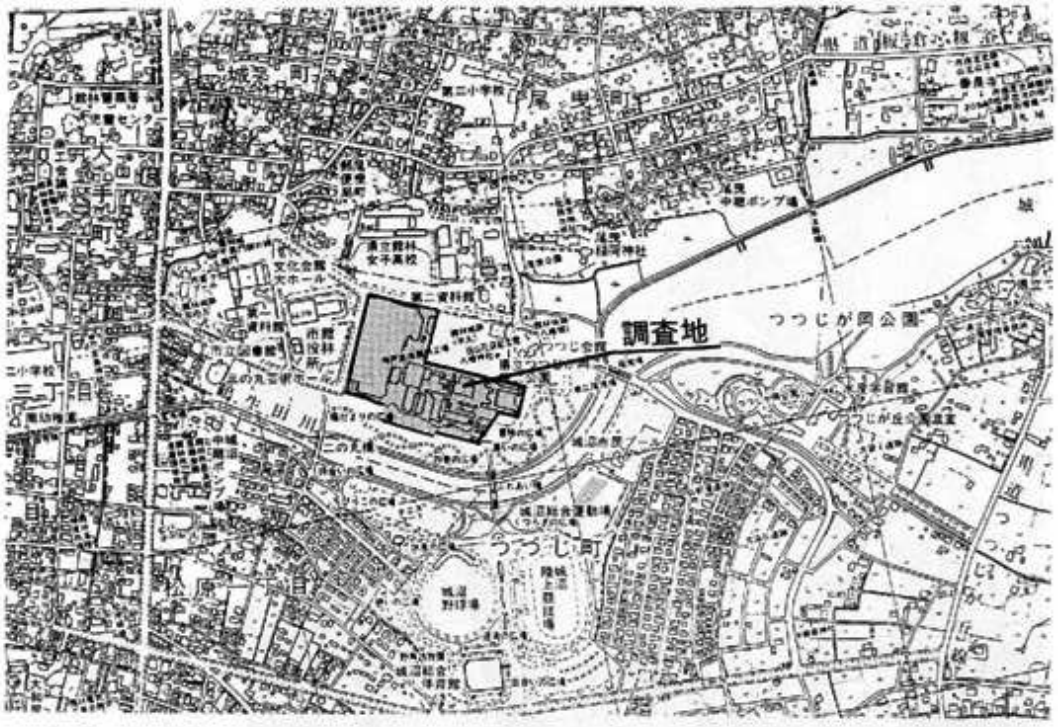
館林城跡は東武伊勢崎線館林駅の東方約1km、館林市街地のほぼ中央に位置している。

城は牙城部と城下町にわかれ、牙城部は城の中心部で、現在の市役所周辺にあたり、城下町は、その北西方に広がり現在の市街地の基礎となっている。

館林城は地形を巧みに利用したいわゆる平城で、牙城部は、現在の市街地を載せる洪積台地（邑楽・館林台地）を浸食して東流する「鶴生田川」が広がり沼状になる地域（城沼）に突出する舌状台地を区切って、本丸、二の丸、三の丸等の郭を配置し連郭式の城郭を造りだしている。

城下町は、牙城部の北及び西方の比較的広く平らな洪積台地（邑楽・館林台地）に広がり、台地周辺の低湿地を利用するとともに、堀や土塁を築き要害を造りだしている。

また、城下町は、牙城部を取り囲むように配置され、その最外部には寺社を配置し、牙城部と城下町全体で城郭としてとらえられる総曲輪的な構造となっている。



第３図　館林城跡周辺図

経　緯

館林城の調査はこれまでに何回か実施されており、その概要の一部はすでに報告されている。

今回の調査は、明治になって館林城の牙城部に作られた上毛モスリン株式会社の工場等を受け継いだ神戸生絲株式会社の移転に伴い、その敷地を買い取った館林市が老朽化した工場建物を解体するにあたり実施したものである。

解体に伴う掘削深度は、館林城の遺構面まで達する可能性があったことから、事前に試掘調査を行い城郭の範囲や現状、遺構の残存状況を確認したものである。

工場の敷地は、館林城の二の丸の東半分及び南郭に相当する。

概　要

調査は、敷地が館林城の二の丸、南郭に相当することから、両郭の範囲や遺物の残存、土層状況を確認するため、建物の無い部分に20本の試掘溝を設定し重機により試掘を行うと同時に人力により精査、遺構確認を行った。

城郭は敷地自体が遺構であり、その範囲も広大であるため、調査は特に二の丸、南郭の郭の範囲の確認（堀の確認）及び、両郭の付属施設（出入口、堀、土塁、櫓台、門等）を確認することを第一の目

写真１　館林城跡調査前

写真２　館林城跡重機による掘削

写真３　館林城跡作業風景

的とし、これに伴う建築物の基礎等を確認することにも重点をおき、残存する城郭図を基本に現況図、現地を見比べながらトレンチを設定、試掘を行った（第５図参照）。

この結果、各トレンチ内で、石炭ガラで埋められた掘込みが確認され、堀であることが判明した。

堀は、工場の建設に伴って埋められていることが想像されたが、工場で使用された石炭の燃えガラによっても埋められていることがわかった。

郭を造りだす整形土は、地山の上にロームや粘土等を混ぜた土を積み地面を造りだしていた。

この堀の確認により、二の丸、南郭、本丸の範囲は、「上野國館林城繪圖」（秋元但馬守時代のもの、以降「絵図」と略す）に画かれたものとほぼ一致することが明らかになった。

その他特筆されることを記すと

ア） 本城門

１トレンチにおいて、敷地の北側から南に延びる整形土（ロームっぽい土）と、それを掘り込んで幅15m程の落ち込みが確認された。

絵図によると、この位置には、南郭から本丸に入る本城門がある位置で、本丸側から南郭に向かって突出部が画かれている。１トレン

写真４　館林城跡２トレンチ

写真５　館林城跡５トレンチ

写真６　館林城跡12トレンチ

写真7　館林城跡6トレンチ

写真8　館林城跡9トレンチ

写真9　館林城跡17トレンチ

写真10　館林城跡20トレンチ

チで確認された整形土及び堀はこの突出部とその東側の堀であることが想像される。

この突出部分は、絵図よりやや東よりに位置している。

門に伴う遺構は確認できなかったものの、堀からは、本丸の石垣を構成していたと考えられる間知石が2点出土している。(絵図には石垣が画かれている。)

イ) 南郭門

南郭門は、二の丸から南郭に入る出入口で、今回の敷地のほぼ中央部にあたる。

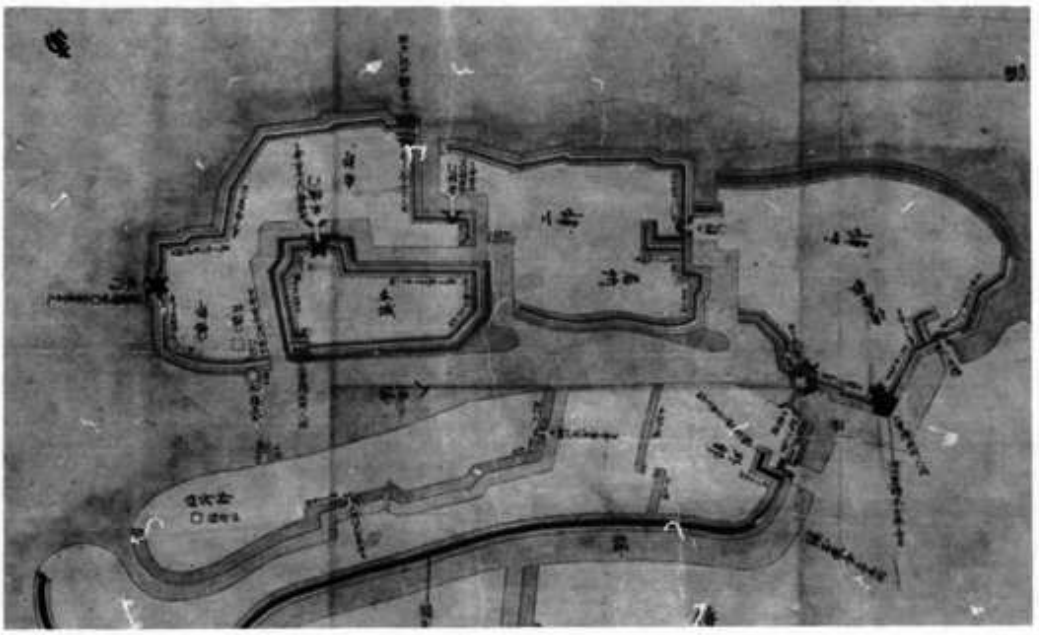
14トレンチでは二の丸と南郭を隔てる堀が確認され、9トレンチの東側では、南郭の郭と考えられる整形土(ローム状)が確認され、19トレンチでは、堀の立ち上がりが確認されていることから、この周辺に位置することが想像される。

門に伴う遺構は確認されてはいないものの、巴瓦(軒丸瓦)が近くから出土している。(絵図には瓦葺きの門が描かれている。)

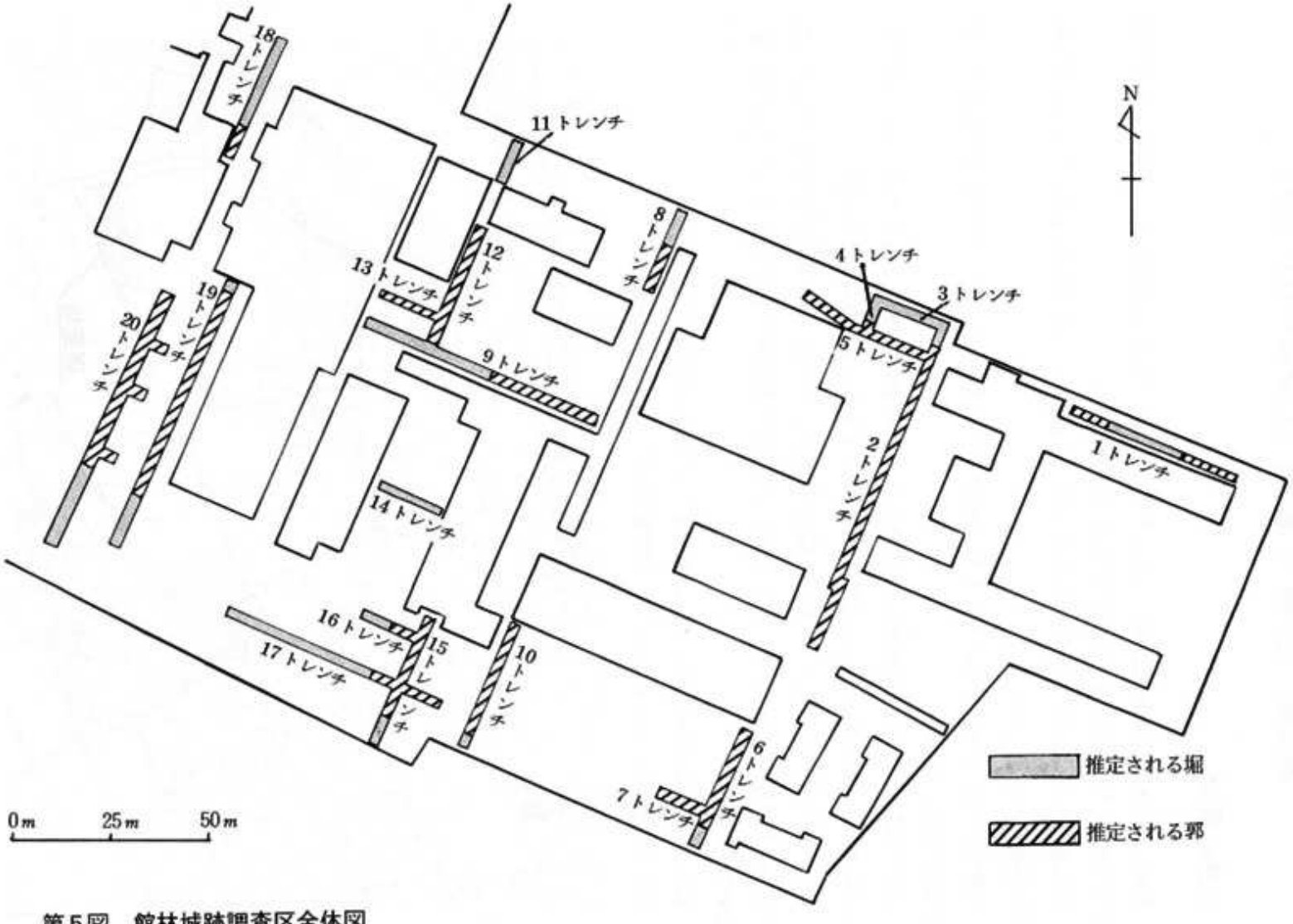
ハ) 南 櫓

城郭図によれば南郭の南西角に二重櫓が画かれており、今回の調査区域のほぼ中央南よりにあたる。(10,15,16,17トレンチ付近)

この部分の10トレンチでは郭の土(整形土)が見られ、南部分で堀となっていることを確認できたものの、15,16,17トレンチでは、後世の攪乱(工場に伴う建物が建っていたことが記録されており、後に解体された)により土層は乱れており櫓台に相当するものは確認できなかった。



第4図 館林城跡 「上野國館林城繪圖」より



第5図　館林城跡調査区全体図

第2節　志 柄 1 遺 跡（しがらいちいせき）

立地と環境

志柄１遺跡は東北自動車道館林インターチェンジの西方約1km、館林市街地の東南方の田園地帯に位置する平安時代の遺物の散布が見られる遺跡である。

館林地方における邑楽・館林台地の南辺は険しくはないものの、浸食がすすんでおり、多くの谷が樹枝状に入りこんでいる。

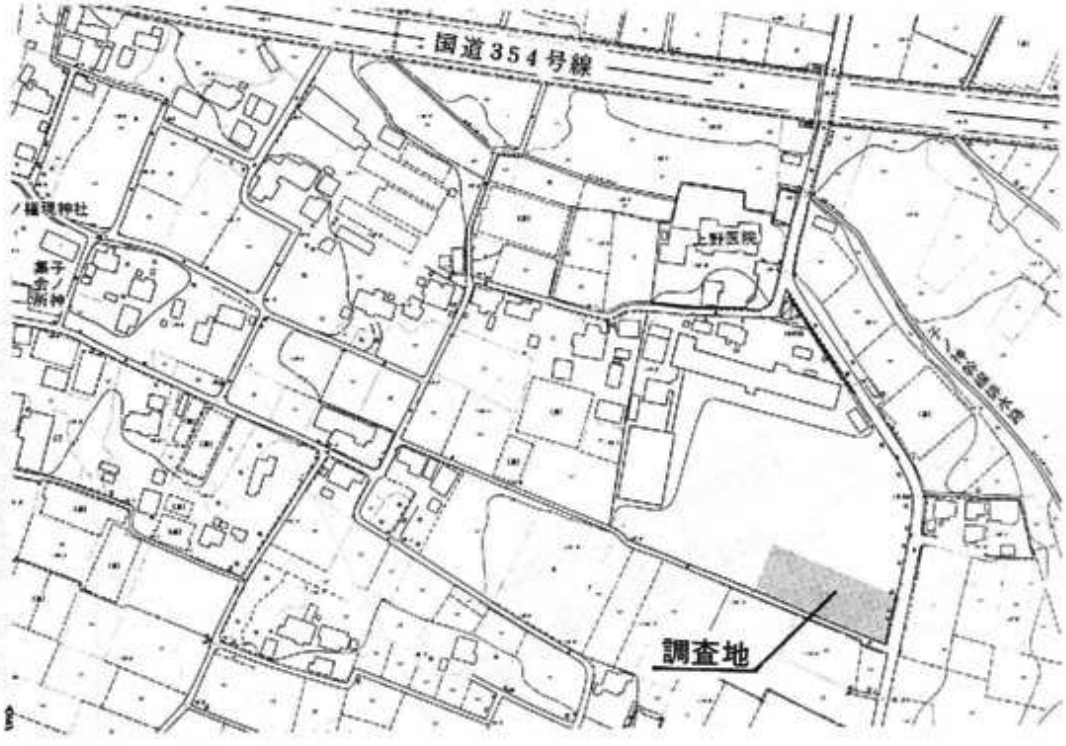
台地の下には、沖積地が広がり、その中央を谷田川が東流しており、台地を浸食する谷はこの谷田川に注いでいる。

志柄１遺跡は、谷田川から北西方に延びる谷を北に望む洪積台地上に所在しており、この谷は手のひら状に３つの支谷に分かれ、志柄１遺跡の面する支谷はその真ん中にあたる。

この３つの支谷を望む高台には多くの遺跡が確認されており、志柄１遺跡周辺には、同じ谷に面する志柄２遺跡、子ノ神遺跡が、同じ台地上には赤生田中島遺跡がみられ、いずれも平安時代の遺物を散布する。

また、周辺には古墳も多く、推定のものを含めて４基確認されている。

周辺は宅地化されつつあるものの、田園風景が多く残る地域である。



第６図　志柄１遺跡周辺図

経　緯

志柄1遺跡の調査は館林市赤生田町1952－2における館林市による児童館の建設に伴う事前確認調査である。

教育委員会では同地が志柄1遺跡に含まれることから、事前に担当課である社会課と協議を行ってきた。

同地は、以前は中学校の校庭として使われており、廃校後もグラウンドとして利用されてきた土地で、これに伴う造成、整地がすでに行われており、現地確認の際には、遺物等の確認はできなかった。

しかしながら、周辺の畑では遺物の採取も見られ、また、周辺の遺跡も多いこと、既往の調査例もないこと、公共事業であること等を考慮し、遺構の有無等地下の状況確認のため、試掘調査を実施することとした。

概　要

調査は、敷地が東西に長かったことから、敷地形状にそって長軸方向に2本のトレンチを設定し、重機により掘削し、精査の上、遺構確認を行った。

同地は、客土してグラウンドとして整地したようで、地表面から約70cmのところできれいなロームが確認できた。

写真11　志柄1遺跡遠景

写真12　志柄1遺跡調査前

写真13　志柄1遺跡重機による掘削

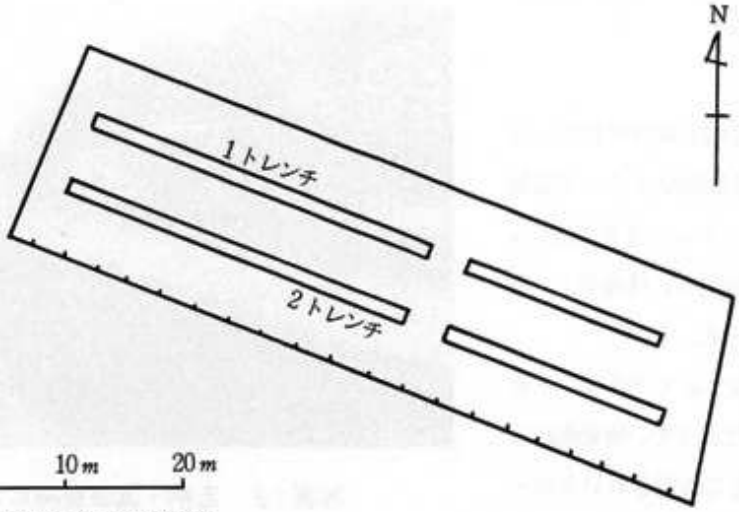
写真14　志柄1遺跡1トレンチ

写真15　志柄1遺跡2トレンチ

ローム面は西から東へむかって緩やかに傾斜しており、調査区の西側では地表下70cmで、東側では1mとなる。

また、調査区東側は現在駐車場となり砂利が敷かれ、その一部はローム面まで達していたが、比較的良好な状態が確認された。

しかしながら、設定した両トレンチ内では、遺構、遺物の確認はなかった。



第7図　志柄1遺跡調査区全体図

第3節　小 蓋 林 遺 跡（こぶたばやしいせき）

立地と環境

小蓋林遺跡は、東武鉄道伊勢崎線多々良駅の東南方約1.5kmの所に所在し、縄文時代以降の遺物が散布する遺跡として「館林市の遺跡」に登載されている。

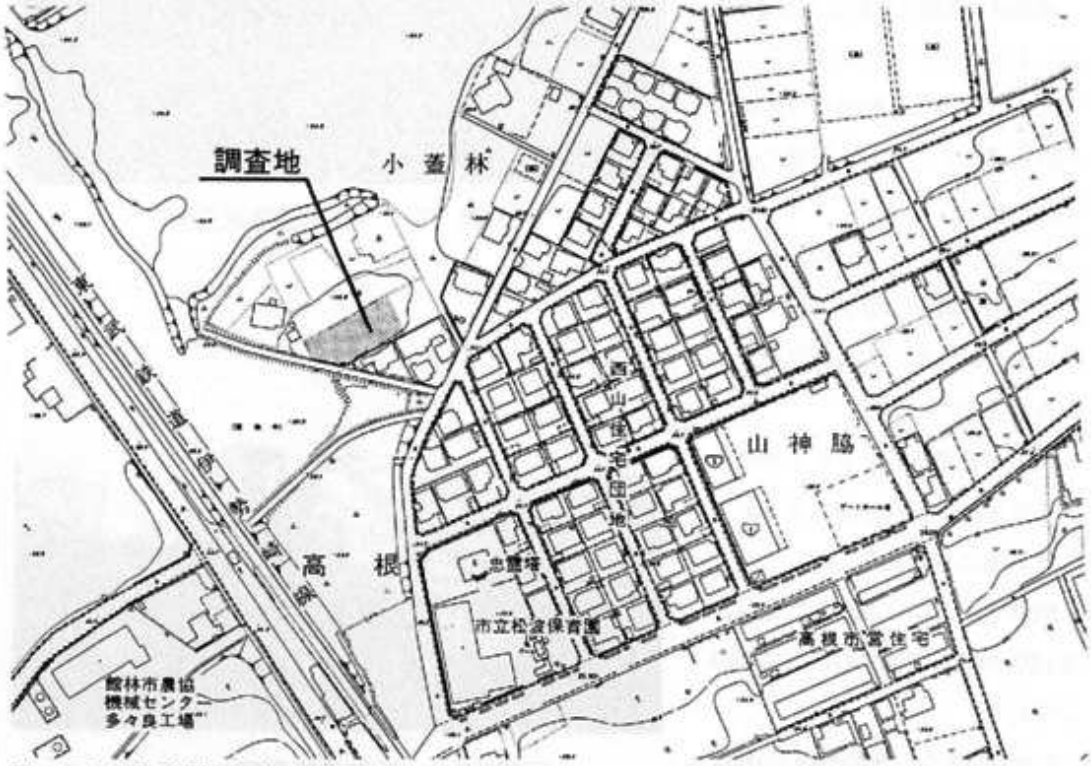
遺跡は多々良沼の東岸に連なる内陸古砂丘のやや北寄りの西斜面に所在し多々良沼を西方に望む位置に所在している。

この内陸古砂丘は、大泉町古海から連なる河畔砂丘といわれ、幅100～200m程の馬背状の高まりで、その起源は下末吉海進時に遡るとされている。

館林地方においては、この砂丘上が最も標高の高い地域で馬背状に連なることから、「倉掛山脈」等とも呼ばれている。

砂丘上に確認される遺跡も多く、旧石器時代の遺跡をはじめ、比較的古い時代の遺跡や古墳が多いのが特徴といえる。

周辺の遺跡としては、旧石器時代の山神脇遺跡、縄文時代から平安時代の遺物が確認される高根・外和田遺跡、梅木山遺跡等があげられるほか、高根古墳群がある。



第8図　小蓋林遺跡周辺図

経　緯

小蓋林遺跡の調査は館林市高根町1052－84、85における地権者長沢清氏による集合住宅建設に伴う事前確認調査である。

教育委員会では同氏の代理人からの問い合わせにより協議を始めるとともに、現地の確認を行った。

同地周辺はすでに宅地化しているが、申請地は畑になっていることもあり、かなりの量の遺物が採取できた。こうしたことから、事前に試掘調査を行い、地下の状況を確認することとした。

概　要

調査は、敷地の長軸にあわせ、南北に2本のトレンチを設定し、重機によって掘削、壁面及び床面を精査することにより、遺構の確認を行った。

現地は、畑で作物が植えられておりその影響で、東よりのトレンチ（2トレンチ）は南側半分しか調査できなかった。

地下の概要は、1トレンチの北側では地表より深さおよそ1mでローム面に達した。

南側では、ローム層までの深さは140cmとなり南にむかって傾斜している。

ロームはトレンチの南側半分は、水の影響を受け白く変色していた。

写真16　小蓋林遺跡遠景

写真17　小蓋林遺跡調査前

写真18　小蓋林遺跡重機による掘削

写真19　小蓋林遺跡1トレンチ

写真20　小蓋林遺跡2トレンチ

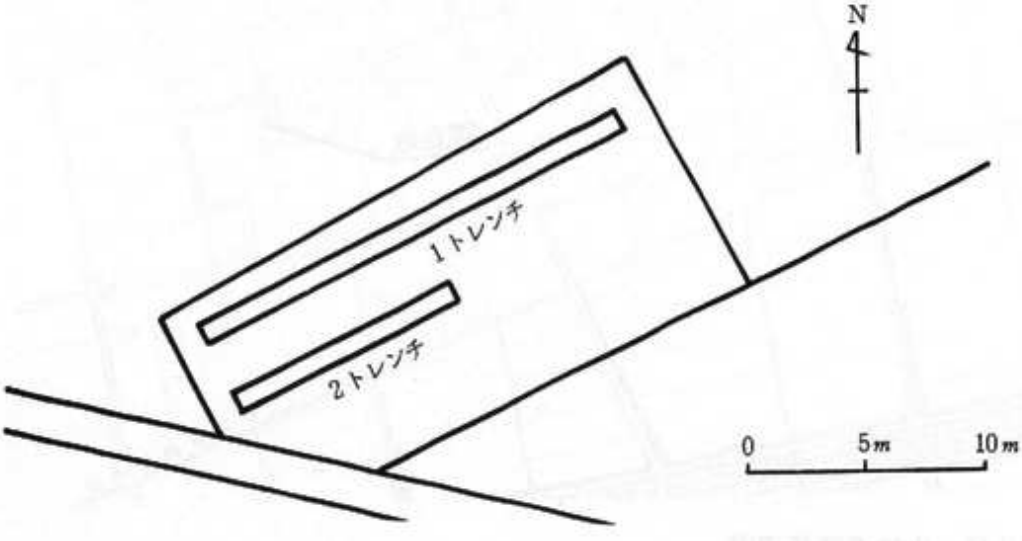
2トレンチでは、地表面下170cmまで掘り下げたがロームは確認できなかった。

また、地表下1mまでは石やガラの混じった土で、他地域からの客土の様相を呈していた。

この客土中から、かなりの量の縄文時代の遺物等が出土しているが、地表面で確認できた遺物は、客土中に含まれていたものと考えられた。

残されたローム面からは、遺構等の確認はなかった。

こうしたことから、現地の客土以前の地形は、谷地であり、客土によって、畑地に変換したもので、開発予定地には、遺跡の存在はないものといえよう。



第9図　小蓋林遺跡調査区全体図

第4節　小　林　遺　跡（こばやしいせき）

立地と環境

小林遺跡は、館林市南西部を東西に走る県道熊谷・館林線と、その南方を東へ流れる新谷田川の間にあり、邑楽・館林台地の南に沿って流れるこの川に面するように位置し、台地の南縁上に広がっている。この遺跡の南には、利根川に沿って東西に沖積低地が延び、一帯は利根川の氾濫原となっている。

当遺跡は、「館林市の遺跡」には古墳時代から平安時代の遺物散布の見られる埋蔵文化財包蔵地として登載され、周辺には、西に平安時代の申子遺跡、東にはやはり平安時代の東山遺跡、新田西遺跡がある。

現在この付近には目立った開発はなく、静かな農村地域となっているが、本市の南西に接する邑楽郡千代田町の昭和工業団地を南に遠望できる位置にあり、主要地方道足利・邑楽・行田線や、前述の県道熊谷・館林線など交通には恵まれており、将来的に開発の見込まれる地域である。

第10図　小林遺跡周辺図

経　緯

小林遺跡の調査は、館林市野辺町字小林443－1の地権者大隈實氏の駐車場造成に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、この土地の農地転用にあたり館林市農業委員会へ提出された許可申請に対し回議を受け、同地の取り扱いについて地権者と協議を開始するとともに現地確認を行った。

開発予定地は遺跡地の南部、南へ緩やかに下る傾斜地上に位置していた。現地周辺の標高は20m余り、該地は50cm～60cm程盛土されており畑地となっていた。隣接地一帯には土師質の土器片散布が見られ、当遺跡では既往の発掘調査例がないことから、遺構の存否等地下の状況把握が必要と判断され、この結果に基づく協議を行い、試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

調査は、斜面に直行するように南北に2本の平行するトレンチを設定し進めた。

この結果、地表から地山となっていたローム面までの深さは、平均75cm程度で、堆積土は前述の盛土が約60cm、その下に15cm程

写真21　小林遺跡遠景

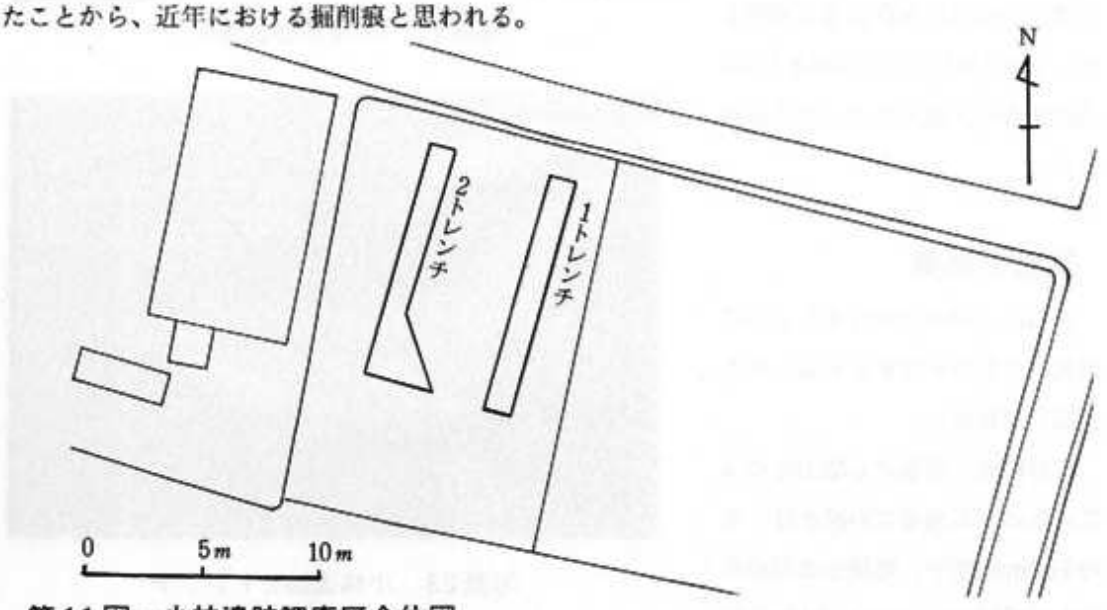
写真22　小林遺跡調査前

写真23　小林遺跡2トレンチ

写真24　小林遺跡1トレンチ

写真25　小林遺跡重機による掘削

の旧耕作土層がありローム面となっていた。この旧耕作土層はローム面上にほぼ水平に堆積しており、かつてローム面に達する削平のあった様子が窺われた。トレンチ内では、2基の土坑状の掘り込みと、1.5m × 3.8mの長方形の掘り込みが確認されたが、いずれも表土層と同様の覆土を持ち、この覆土に含まれていた若干の遺物も、地表採取の土器片とほぼ同じく磨滅した小片であったことから、近年における掘削痕と思われる。



第11図　小林遺跡調査区全体図

第５節　当郷本郷遺跡（とうごうほんごういせき）

立地と環境

当郷本郷遺跡は、館林市東部で東西の帯状に延びる城沼の周辺に分布する遺跡の一つで、遺跡地はこの城沼の北岸にあり、南に城沼、北側には渡良瀬川の氾濫原である広大な沖積低地が広がり、南北を低地に挟まれた洪積台地上に位置している。この台地は東西に細長く延び、その中央を台地に沿って県道板倉・籾谷・館林線が走っている。

当遺跡は、「館林市の遺跡」には平安時代の埋蔵文化財包蔵地として登載され、周辺には、東に古墳時代から平安時代の当郷遺跡、北方に平安時代の当郷新田遺跡、西には山王山古墳を含む善長寺付近遺跡、更に西に古墳時代の住居址の確認された尾曳町１遺跡、同じく古墳時代の尾曳町２遺跡など、この城沼北岸には前述の帯状に延びる洪積台地上に古墳・平安時代を中心とした遺跡が分布している。

この付近には目立った開発はなく、北側の沖積低地には広大な水田が広がり、静かな農村地域となっている。近年ではカントリーエレベーターが建設され、東毛の穀倉地帯の一翼を担っている。

第１２図　当郷本郷遺跡周辺図

経　緯

当郷本郷遺跡の調査は、館林市当郷町甲220、乙220、224における館林市教育委員会による郷谷公民館の建て替え工事に伴う事前確認調査であった。

文化振興課では、公民館建て替え工事に先立ち、社会教育課より同地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を受け、現地確認を行った。

建て替え予定地は遺跡地の北辺で、台地北側の緩やかな下り斜面上に位置していた。標高はほぼ20mで、現地には現公民館が建っており、周辺を含めた踏査では土師質の土器片散布が見られた。当遺跡では既往の発掘調査例がなく、遺物の散布も見られることから、遺構の存否等地下の状況把握が必要と判断されたため、再協議の結果試掘調査を実施することとなった。

調査の概要

現地には既存の木造公民館が建っていたため、トレンチは、現建物を避け、工事に際して掘削工事を伴う部分に2本、建物の北側に東西方向で平行するように設定し調査を進めた。

この結果、コンクリート柵、建

写真26　当郷本郷遺跡遠景

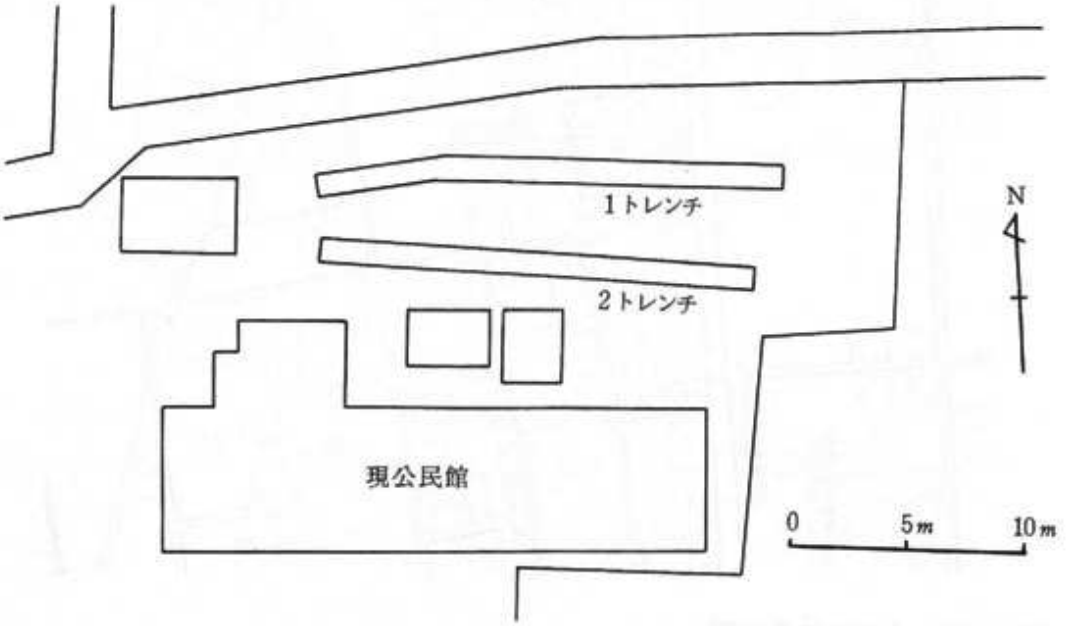
写真27　当郷本郷遺跡調査前

写真28　当郷本郷遺跡重機による掘削

写真29　当郷本郷遺跡1トレンチ

写真30　当郷本郷遺跡2トレンチ

物の基礎、ゴミ穴、埋め戻し土等近年のものと思われる攪乱がトレンチの随所に確認され、攪乱等の見られないトレンチの東側部分においても、2本のトレンチのいずれからも遺構は確認されず、遺物も小破片が数点出土したに過ぎない。



第13図　当郷本郷遺跡調査区全体図

第5節　八　方　遺　跡（はちがたいせき）

立地と環境

八方遺跡は、東武鉄道佐野線渡瀬駅の西方0.5kmの所に所在する古墳時代から平安時代にかけての集落跡である。

邑楽・館林台地の北側には、広大な沖積低地が広がり、低地中を渡良瀬川が東流する。

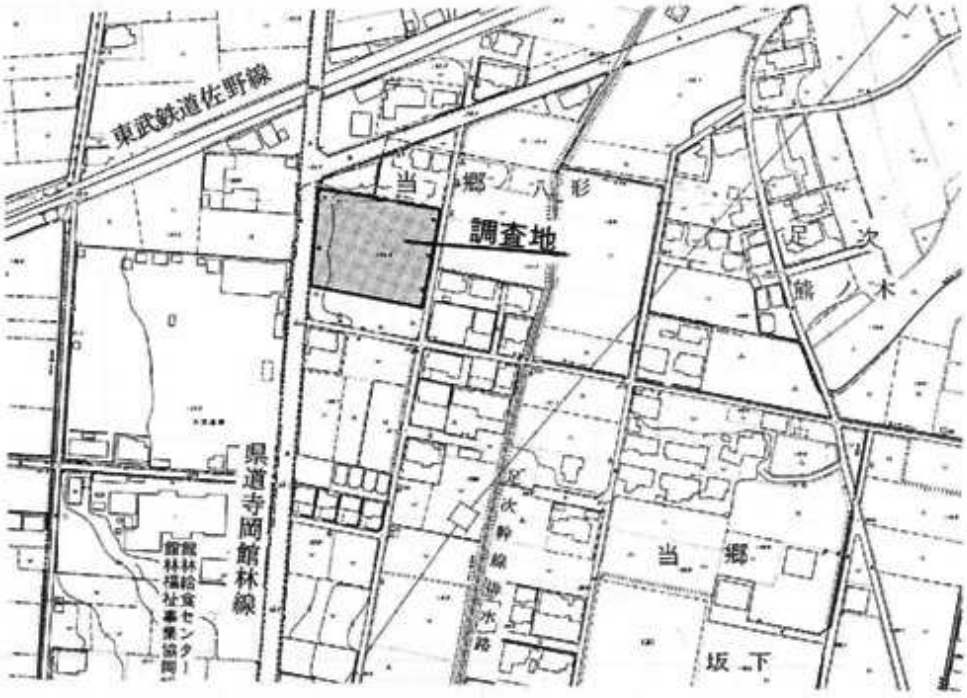
現在、渡良瀬川は築堤され、その流路を変えることはないが、かつては洪水等のたびに変化していたと考えられており、低地中には多くの旧河道を確認することができる。

この旧河道に沿って、自然堤防が発達している。

八方遺跡を載せる台地は、邑楽・館林台地の北岸、渡良瀬川の沖積地に突出した半島状の舌状台地で、この舌状台地下には旧河道を観察することができる。

八方遺跡における発掘調査はすでに何回か行われており、台地上に古墳時代から平安時代の住居跡が多く確認されている。

周辺には、岡野・屋敷前・岡遺跡（縄文～平安）、大道北遺跡（古墳～平安）、新倉前遺跡（奈良～平安）がある。



第14図　八方遺跡周辺図

経　緯

八方遺跡の調査は、館林市坂下町字八形3244－1,3244－2における株式会社小川屋による一般開発（倉庫建設）に伴う事前確認調査である。

教育委員会では同地が八方遺跡に該当することから、その取扱いについて協議を開始した。

八方遺跡は、これまでの調査により、多くの住居跡が発掘されている遺跡で同地も現地確認を行ったところ多くの土器片を採取した。

こうしたことから、遺構等の確認を行うため試掘調査を実施した。

概　要

調査は、開発区域が2,300㎡と比較的大きかったことから、敷地全体にトレンチを設定し、重機により掘削、壁面、床面を精査することにより、遺構の確認を行った。

調査区全体には合計7本のトレンチが設定でき、調査区北側より1～7トレンチとした。

1～3トレンチでは地表下約40cmでローム層となっていた。

表土は1層のみである。

この面で数条の溝やいくつかの落ち込みを確認したため、1、3トレンチでは落ち込みの範囲を確認するため拡張を行った。

写真31　八方遺跡遠景

写真32　八方遺跡調査前

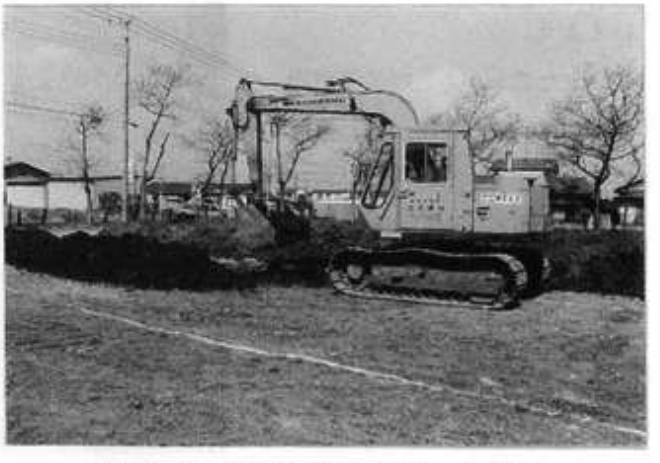


写真33　八方遺跡重機による掘削

しかしながら、明確に住居等のプランを呈するものはなく、いずれも覆土が表土と同じであることから新しいものと考えられた。

4、5トレンチでは、中央部に堅くしまったロームが確認された。

しかしながら、このロームも黒い土が混じっていたため、深掘りを行った。

この結果、中から材木の燃えカス、鉄屑等が出てきた。

6，7トレンチは全体が同様の状況を呈しており、明らかに深く掘削された痕跡であることがわかった。

地権者に話を伺ったところ、同地には以前、火事の廃材等を処分したことがあるとのことで、その際の掘削の痕跡であろうことが予想される。

また、現地確認の際採取された遺物は、この時掘り出されたものといえよう。

こうしたことから、開発予定地内には、現状では集落に関わる遺構等の存在はないものと考えられた。

写真34　八方遺跡調査区全体

写真35　八方遺跡調査区全体

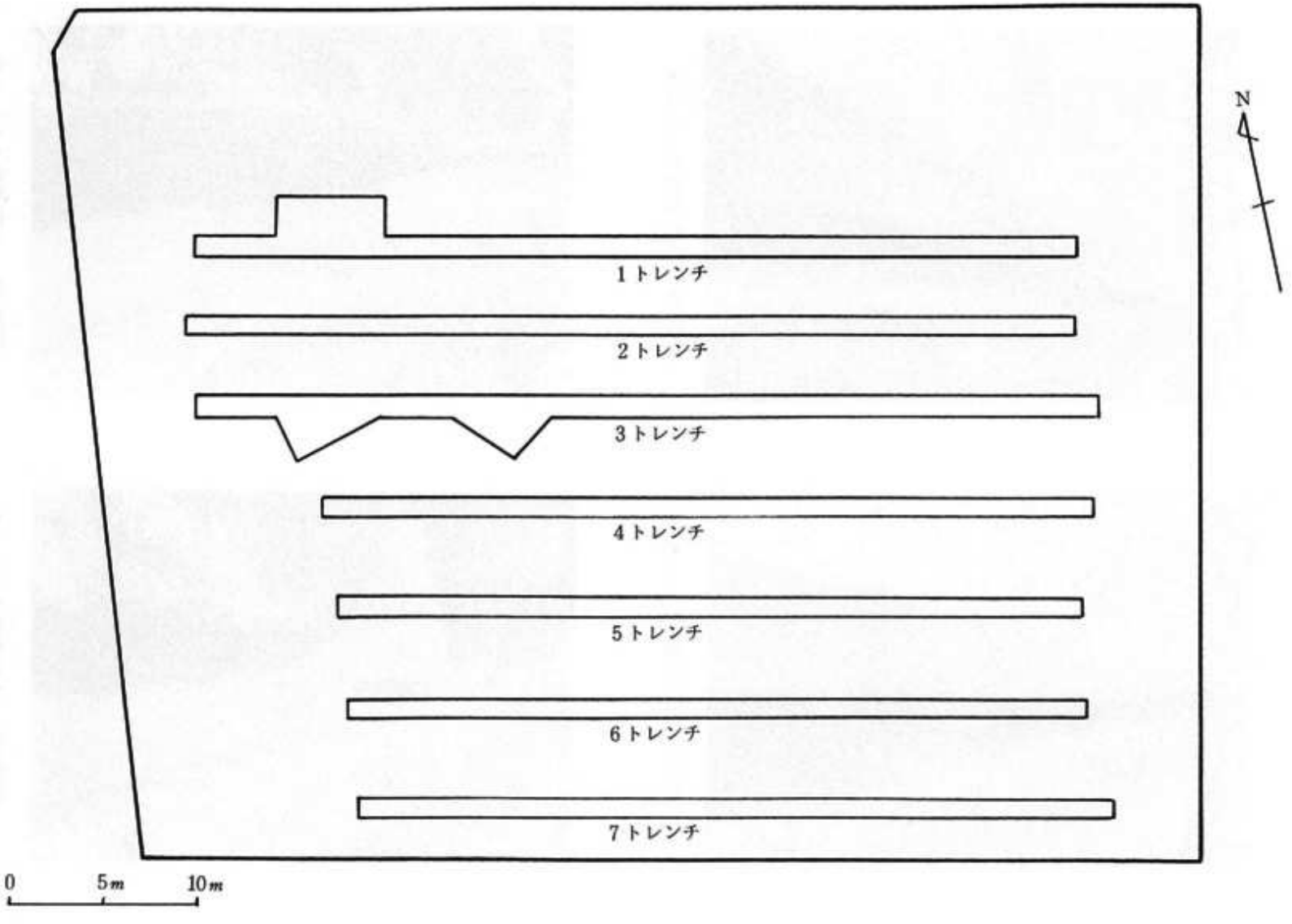
写真36　八方遺跡1トレンチ拡張部

写真37　八方遺跡1トレンチ

写真38　八方遺跡2トレンチ

写真39　八方遺跡3トレンチ

写真40　八方遺跡4トレンチ



第15図　八方遺跡調査区全体図

参 考 文 献

館林市教育委員会　「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第1集～第24集」

館林市教育委員会　「茂林寺沼及び低地湿原調査報告書　第2集」

館　　林　　市　「館林市誌　歴史篇」

館　　林　　市　「館林市誌　自然篇」

館林市立図書館　「館林双書」

群馬県教育委員会　「群馬県の遺跡」

群馬県教育委員会　「群馬県遺跡台帳」

群馬県林務部　「群馬県の貴重な自然　地形・地質編」

群　　馬　　県　「群馬県史」

群　　馬　　県　「上毛古墳綜覧」

板　　倉　　町　「板倉町史」

大　　泉　　町　「大泉町史」

抄　録

フリガナ	タテバヤシシナイイセキハックツチョウサホウコクショ
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書
副書名	−
巻次	−
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	26集
編著者名	岡屋英治　川島孝男
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374　群馬県館林市城町1−1
発行年月日	西暦1994年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館林城（タテバヤシジョウ）	館林市城町（シロマチ）	10207	33	−	−	19930414 19930502	520	工場解体
志柄1（シガライチ）	館林市赤生田町字志柄（アコウダチョウアザシガラ）	10207	127	−	−	19930714	100	児童館建設
小蓋林（コブタバヤシ）	館林市高根町字小蓋林（タカネチョウアザコブタバヤシ）	10207	7	−	−	19931219	45	集合住宅建設
当郷本郷（トウゴウホンゴウ）	館林市当郷町字本郷（トウゴウチョウアザホンゴウ）	10207	42	−	−	19940310 19940311	50	公民館改築
小林（コバヤシ）	館林市野辺町字小林（ノベチョウアザコバヤシ）	10207	86	−	−	19940316	45	駐車場造成
八方（ヘガタ）	館林市坂下町字八形（サカシタチョウアザヘガタ）	10207	18	−	−	19940323 19940326	275	倉庫建設

所収遺跡	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
館林城	城館	近世	郭、堀	瓦、陶磁器片	縄張りの確認
志柄1	−	−	−	−	−
小蓋林	−	−	−	−	−
当郷本郷	−	−	−	−	−
小林	−	−	−	−	−
八方	−	−	−	−	−

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第26集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印刷所　オーラ印刷有限会社
発行年月日　平成6年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう